

する。

⑥ 研究のための実験学校および研究員は次のとおりである。

	学 校	校 長	研究員
福島市	荒井小	緑川篤郎	大平光一
松川町	松川小	作山佐助	星裕次郎
ク	金谷川小	武藤俊雄	高橋敏朗
ク	水原小	田中政衛	渡辺麟一郎
飯坂町	平野小	佐藤厚友	菅野三男
ク	東湯野小	柳沼繁夫	小河伸也
吾妻村	野田小	内池幸吉	渡辺弘雄
ク	水保小	鈴木金佐	戸井田健
保原町	上保原小	安斎武	浅野栄
桑折町	半田醸芳小	五十嵐秀夫	寺島泰
ク	伊達崎小	内池謙三	市川多門
ク	睦合小	大谷香	佐藤健一郎

(3) 望ましい学習指導法

昭和31		34年		36年		
				農山村	純農村	普通農村
語い	92.1	聞く	83.6	95.4	86.9	91.3
表現	101.7	書く	90.9	94.6	87.0	94.6
読解	91.1	読む	80.5	92.7	86.1	87.5

本県は、31年度より「書く(表現)」の領域が比較的全国水準に接近し、「読む」領域がとくに低くなっていることがわかる。しかも、昭和31年度の傾向はすこしも変ることなく持続し、全体として、そのままの傾向を持っていっそう低下している。

これが、昭和31年度の「書く」領域の水準のままでは他の領域が高まるなら喜ぶべきことである。しかし、34年度からは「書く」領域が低下して、他の領域との差がちぢまったということで、ことさら「読む」「聞く」の領域が「書く」領域の程度に向上したということとは認められない。

ところで「書く」領域が高かったことをさらに検討すると、次のとおりである。

昭和31年度

漢字	かなづかい	文法(副詞・接続詞)
104	101	95

つまり、到達率を高めているのは、とくに「漢字」「かなづかい」のような、形式的に練習できる分野のようなものである。指導のうちで、高度な指導技術を要する読解が低いということは、極論すれば、学習指導法について、全国的な水準より、この方面の研究がかなり遅れているということである。

このような問題点を、さらに児童生徒のつまずきから検討したのが「診断的性格を帯びた福島県標準学力検査問題の報告書」にもられたことであった。

そして、これを仮説として実施し、その効果を検証

① 本県における学力の問題

小学校の全国学力調査の国語科は、昭和31、34、36年と3回にわたって実施された。この間の成績の推移を学力偏差値(全国平均=50 標準偏差=10)に換算すると次のとおりである。

昭和31	34年	36年
48.8	46.5	46.6

3回に現われた本県の国語学力の全国的な位置づけは、31年度を最高にして、34年度で低下し、現在まで横ばいを続けていることがわかる。

さらに、国語科のどの領域に問題点があるのかを検討してみると文部省では、問題を三つの領域にわけているので、各領域の全国平均を100とした場合、本県はどの程度に全国水準に到達したか(到達率)を示すと次のとおりである。

するための方法的な研究を昭和35年にとりあげた。この仮説の理論的な内容は「望ましい学習指導法の立証的研究の報告書」において述べたとおりである。

② 学習指導

昨年度の報告書では、どちらかといえば、一般化した形で理論的な立場を述べた。これは、学習指導法を小手先のものとする考え方を否定して、あくまでも教科の論理から出発すべきことを強調したかったからである。

本年度は、この理論的な仮説を教材に即して、いっそう具体化しようとするのをねらいとした。指導におけるおもな留意点は次のようなことである。

ア こどもの読みの過程を考える

○ 読み手に目的意識を持たせる。

日常での「生活読み」は、生への必要性から出発するので、はっきりした目的意識を持って文章に接するしなくては読み手は自分の必要から要点を明確にとらえていく。

この方法は、学習においても考えなければならない学習のねらいを見定めて読み手の心構えをつくる上でだいじである。また、それによって読み手はどのような手順で読んだらよいかも、しだいにわかってくる。

○ 読みの焦点を考える

内容は文章の叙述に従って、継時的に子どもに表象されるであろうが、子どもにとって、文章は羅列にすぎない、何を讀みとるかという焦点(目的)があつて